



そんな馬鹿な!

豊平区支部 河口道夫

現代は論理と了解の世界といえるだろう。言葉を変えると、理屈とその理屈の受け取りかたの世の中ということである。そのため議論をしている時点で論理的に不適當な事柄は排除され捨て去られている。また論理が正しいとしても、時にはそのように理解できないとしてこれも捨て去られることが多い。身近なところでは国会議員が「そのような認識がなかった」というような言葉に端的に現われている。ものの受け取りかたは人様々であり、人々は共通の言語をもたないということになり、はなはだ意志の疎通が困難になっている。

このような現象は突然できあがったものではなく、教育を受けてきた過程でいやというほど叩き込まれた教育の華やかな成果ともいえる。例えば「なぜ?」という質問に対して、それなりの論理が組み立てられれば「よく出来ました」といわれ、そのことが真理とされる。なにか弁明をしなければ身の証がたたない。例えば交差点での交通事故は一方的に事故を起こしたとされる方が非難の対象とされていた。急に路上にでてきた人に損傷を与えた場合は、前方不注意、速度制限オーバーのどちらかである。急にといっても出た方はゆっくりであるし、ひいた方は急に飛び出しである。交差点でも注意しなければならぬのは一つ向こうの信号がよく見える場所である。それはとりもなおさず今通過しようとしている交差点の信号がよく見えないということであるが、それでもかなりの改善がされてきていることは認めざるを得ない。

このようなことが積み重なって世の中が出来上がっているようであるが、特に最近は不安をおぼえる。この現象の顕著な欠点は、その時点時点の論理であるということ、論理的に説明が

出来ない事柄が捨て去られていくことである。

別な視点よりすると static な論理であり、決して dynamic な論理ではないというところに最大の欠点を持っている。もう一つは、ある時点で A と B とどちらが良いかと判断しなければならないときに A がよいとされると B の系列は永久に市民権を得ることはない。かなり古いことになるが「尻尾のない鶏」の話はその良い例である。メンデルの遺伝学が隆盛をきわめた時代であるが、「尻尾のない鶏」の尻尾の遺伝子は劣性遺伝子とされていた時代がある。とはいってもどちらが正しいのか私には定かではないが、理屈は「尻尾」の遺伝子が優性遺伝子であれば世の中の鶏はすべて「尻尾のない鶏」のはずであるが鶏にはすべて尻尾があるのではないかという反論である。現在の科学であるどちらが正しかったのか実証されているはずであるが結論は知らない。

もう一つ困った「論理」は、犯人が拳がればその他のことは一切無罪放免となる論理である。犯人探しが好きなのは人間の性かもしれない。先日起きた不幸な中華航空の飛行機事故は、事故原因がパイロットの操縦ミス（パイロットミスというとは75%は当たるとのことであるが）となりそうである。犯人が拳がれば世の中は満足し、忘れ去り、また事故が起きるといふ繰り返しとなる。この飛行機がフランス生まれということに興味もたれる。それというのもフランスの機械はアジア人にはなかなか理解しがたいものだとも常々感じていたからである。フランス流とアジア流では考える順序が異なっている。そのためフランス語で考えないとアジア人にとってはフランスの機械は思うようには動いてくれない。事故の再発を防ぐために操縦技術をマ

スターすることとマニュアルの勉強が強調されているが、それよりも操縦士を一年間フランスにやって自由に遊ばせるほうがよりよい操縦ができるように思える。このことによりフランス流の考え方が身に付くと思われるからである。

医療の世界でも似たような現象が起きている。すなわち negative な現象は全て捨て去られその結果不幸な出来事が起きていることが最近の報道にもみられる。犯人を捜しだし処罰をくわえ、このようなことが二度と起こらないように厳重に取り締まるのがよいという図式が完成する。それで人々は安心して満足する。結果的にはこのことも「犯人捜し」に終わるのではないかと思われる。positive な結果の集積により造られたピラミッドがもつ宿命かもしれない。

話はそれるが、私の好きな言葉に碁打ち藤沢秀行の「敗者悔やむなく自らの力乏しきを哀しむ、誤手悔やむなく我が力たらざるを思う」がある。これは negative な思考として好まれない人も多いと思うが、要は視点の相違であろう。逆に勝った方でさえも、将棋名人羽生善治の「勝つのは偶然のこともあります。負けるのは必然があります…」というのもあり、あながち敗者の嘆きと片付けるわけにもいかないと思われるのだが。

医療を行う側も受ける側も同じ穴のムジナである。種々の新しい検査が次々と開発されそれなりの成果があげられていることは否定できないが、医療を受ける側も成された検査の結果に多大の関心を持っているようである。検査の結果が吉とであれば幸せになり凶とであれば不幸になるのが慣であるが、世の中そう簡単にはいかないもので、先日人間ドックで満点をもらった人が一ヵ月後には重病にさいなまれるという不幸にみまわれた。本人にとっては「そんな馬鹿な」と叫びたい気持ちと推察される。頭では理解できても気持ちは別である。

医学の進歩に対する期待感が強まるにつれ現実と離れていくように思われてならない。出来ることを話すことにより安心感を与え、出来ないことを話さないことにより後に絶望感を残す。どちらを選択するかはそれぞれの意志によることであるが、知らない間に結果的に一方を選択したことになるのが世の中なのかもしれない。ともあれ借金は出きるだけ早く戻しておきたいものである。

「そんな馬鹿な」ことが日々おきている昨今であるが英知を尽くして解決してもらいたいものである。
(河口内科クリニック)

